



大手前大学
大手前短期大学リポジトリ

『鋸山奇談』考

著者	前田 禮子
雑誌名	大手前女子大学論集
巻	11
ページ	15-20
発行年	1977-11-06
URL	http://id.nii.ac.jp/1160/00001155/



『鋸山奇談』考

前 田 禮 子

ポウの『鋸山奇談』（‘A Tale of the Ragged Mountains’）は、1844年に発表された作品である。これは、ベドロウ（Bedloe）という青年がヴァージニア州の山中で体験した異常な事件の物語である。事件の設定は1827年である。ポウがすでにメスマー（F. A. Mesmer（1734—1815））の説、動物磁気催眠論（doctrine of animal magnetism）を知っていたことは文中から明らかである。ド・クィンシーの『阿片常用者の告白』（1821年）も、『鋸山奇談』発表の20年ばかり以前の作であるから、ポウは知っていたであろう。

ベドロウがヴァージニア州シャーロットの通称鋸山の山中で体験したことは、モルヒネ常用による幻覚とテムプルトン医師の催眠法によるものであることはいうまでもない。催眠法を扱った作品はホーソンの作品のなかにもあって、そこでは神秘的まがまがしさが強調されていた。ポウの『鋸山奇談』は呪詛的色彩はない。きわめて淡々と催眠法のもつ側面がえがかれている。

ポウのあげている問題のいくつかは、フロイトの出現以後、常識となっているものもあれば、まだ心理学の分野で解明されていないものもある。科学的にはまだ不明であっても、現象としてさまざまなことを催眠法は示唆してきた。『鋸山奇談』から、ポウの興味をもっとも大きくとらえた問題は、催眠法が転生を暗示していることであつたろうことがうかがえる。そのことについて、引用をあげながら触れていきたいと思う。

Even about his (Bedloe) age—although I call him a young gentleman—there was something which perplexed me in no little degree. He certainly seemed young—and he made a point of speaking about his youth—yet there were moments when I should have had little trouble in imagining him a hundreds of age.

さてベドロウという名の青年がいる。「彼は自分のことを青年であるといっているので青年であると思うが、ときおり彼が何百才も年を経ているのではあるまいかと思われることがある。どうも彼には腑におちないところがある」と、述べられている。

…a long series of neuralgic attacks had reduced him from a condition of more than usual personal beauty, to that which I saw.

彼は、若くしてすでに長い間、神経痛の発作にたびたび見舞われて、そのために彼の外貌が著しく老化したのであると弁明している。

Doctor Templeton had been a traveller in his younger days, and at Paris had become a convert, in great measure, to the doctrine of Mesmer. It was altogether by means of magnetic remedies that he had succeeded in alleviating the acute pains of his patient.

一方、ベドロウの主従医であるテムプルトン医師は、若い頃パリに旅したことがあって、メスマーの学説に傾倒している。彼が患者の激しい苦痛を軽減するのは、もっぱら磁気すなわち催眠法をもちいてするのである。

『鋸山奇談』考

By a frequent repetition of these (experiments), a result had arisen, that between Doctor Templeton and Bedloe there had grown up, little by little, a very distinct and strongly marked *rapport*, or magnetic relation.

いったん患者と医者との信頼関係ができあがってしまうと、催眠法の実験が容易になる。くりかえしなども実験がなされたあと、患者と医者とのあいだに、ラポール (*rapport*) という交感関係の通路ができるようになった。ひじょうに著しい交感関係ができるようになった。

this power itself had attained great intensity when I first became acquainted with the two, sleep was brought about almost instantaneously by the mere volition of the operator, even when the invalid was unaware of his presence.

このラポールの力は強烈さの度合いを増して行って、「私」つまり、この作品はポウらしき第三者がベドロウとテムプルトン医師との事件を証言する形式になっている、その「私」が二人と知り合った頃には、催眠は、ほとんど誘導者の意のままに、ほとんど即座に、しかも被誘導者が誘導者の存在を意識せぬときですら、遠隔交感によってもたらされるのであった。

It is only now, in the year 1845, when similar miracles are witnessed daily by thousands, that I dare venture to record this apparant impossibility as a matter of fact.

「1845年の今にしてはじめてこの作品を世に出す決心がついたが、それは日常、同様の奇蹟が無数に目撃されるようになったからである。実に、不可能とおもわれることが現実の事実なのである」とポウは述べている。こういったことは、恐怖小説のテーマなどではなく、冷厳たる事実として受けとめなければならない、とポウは言いたいのであろう。二十世紀の現在でも、催眠法による遠隔交感という恐るべき事実、識者をのぞけば、一般にはあまり配慮がなされていないようである。一度催眠法をかけられたことのある被誘導者が相手のばあい、たとえば電話でまたはレコードやテープに録音した S F (*sleep formula*) によってでも、または単に誘導者が意志を働かすだけによっても、簡単に催眠をかけることができるのである。遠隔交感によるかどうかは別として、ポウの作品にはしばしば、催眠法の被誘導者らしき人物が登場する。たとえば『アッシャー家の崩壊』のマデリーンもそれらしくみうけられる。

The temperature of Bedloe was, in the highest degree sensitive, excitable, enthusiastic. His imagination was singularly vigorous and creative.

ベドロウの気質は、きわめて感受性が強く、興奮しやすく、熱狂的である。想像力もきわめて旺盛で豊かである。催眠の感応力は、特殊な体質の人間がとくに鋭い、というのであろう。ベドロウは、『アッシャー家』のロデリックと非常に共通した体質をもっている。おそらく『リジーア』や『ベレニス』など一連の作品の男性も同様の特異体質をもっているであろう。『リジーア』の男性は、彼自身が霊媒になっているらしくみうけられるところがあるからである。

and no doubt it derived additional force from the habitual use of morphine, which he swallowed in great quantity, and without which he would have found it impossible to exist. It was his practice to take a very large dose of it immediately after breakfast each morning, —or, rather, immediately after a cup

『鋸山奇談』考

of strong coffee, for he would eat nothing in the forenoon,

その感応力は、モルヒネの常用によっていっそう高められる。しかもベドロウは、そういった極端な性格によるためからか、朝食後、大量のモルヒネをあおる。それなしには暮せなくなっているのである。朝食といっても、一杯の強いコーヒーのみである。そして午前中はほかになにも食べないのである。そういった状態では感応力が高まるのは当然である。そうまでしなくとも、現在欧米で行われている年令逆行 (age-regression) の実験は、幻覚剤を使わなくとも、催眠によるだけで十分のようである。

—and then set forth alone, or attended only a dog, upon a long ramble among the chain of wild and dreary hills that lie westward and southward of Charlottesville, and are there dignified by the title of the Ragged Mountain.

それからベドロウは散策にでかける。シャーロットビルの西と南にまたがるその名もいかめしい「鋸山」へ、犬をつれてでかけるのである。山へでかけて幻覚を見るというのは、やはり一つの文学的修辭であって、これなくしても遠隔交感による催眠や幻覚は十分生じうるのである。『ヴァルデマー事件の真相』と『メスメリズムの啓示』も催眠法を扱っている作品であるが、それらは密室の中で行われる実験であるため、ある種の陰湿さをとまなっている。それに反して、『鋸山奇談』は、山中で幻覚がくりひろげられるため、他の二作品にくらべれば、もっとも明るく文学的に洗練されている。

この作品が催眠法による遠隔交感が主題であることはすでに述べた。ホーソンの『七つ破風の家』においても遠隔交感による事件がえがかれてあった。ホーソンのばあい、一度被誘導者になったために、それ以後、その同じ誘導者の意のままにどこにあって誘導される少女の悲劇のエピソードであった。『鋸山奇談』のばあい、誘導者であるテムプルトン医師ですら、遠隔地にあるベドロウと交感の状態にあるということに気がつかないで、あとになって知ったことであった。

もしテムプルトン医師がまったく関知しない事件の幻覚をベドロウが山中で見たのであれば、ベドロウはそのとき彼の前世の記憶をよみかえらせていたといえるかもしれない。しかし物語がそういう設定であれば、ベドロウの見た幻覚が事実の記憶であるかどうかということをもテムプルトン医師は証明することができない。テムプルトン医師も周知の一つの事件をベドロウが幻覚で見たということにしなければこの作品は一貫性をもつことができなかつたであろう。そうすると、テムプルトン医師が回想していたその事件を、ベドロウがその同じ時間に、自然催眠の状態におちいって、体験していたということは、かならずしも、ベドロウが逆行催眠をおこなって自分の前世のその事件を追体験していたと結論づけることはできない。なぜかといえばそのときベドロウは山中で自分を完全に喪失したトランス状態にあって、テムプルトン医師の脳波の波長に完全に同調していたのであるから、テムプルトン医師が回想していたその事件とベドロウが幻覚でみた事件が同一であったからといって、それはベドロウの前世などとは関係のないたんなる偶然の一致の遠隔交換であったかもしれないからである。この点に、この作品が転生の事実を説得させようとするには、論理的にみれば、構成上の矛盾があるのである。テムプルトン医師とベドロウはたんに、精神感応 (telepathy) という現象をもったにすぎないといえなくもないからである。しかし転生の事実らしきものをこういうそうとうに説得力のある作品の形式でポウが試みようとしたことは、やはりそれなりに評価されるべきことであろう。現在の心理学の課題もやはりこの分野にあるのであって、フロイトが示唆したものは、神経症患者の治

『鋸山奇談』考

療以上のものであることを知るのである。

催眠法によって前世の記憶をたどりうるのではないかという仮定は、現在の欧米の心理学がそれにもとずいて実験をくりかえしている段階にあるが、今をさかのぼる百年以上もまえにポウがこう作品を生んだからといって、こういう発想がまったくポウ自身の想像によるものであるとは、おそらくいえないであろう。世紀末にさきがけるしかも科学精神のさかんなポウの当時にかぎらず、隠微な秘密主義のヴェールに包まれた綺想や不可思議な現象をめんめんと伝える土壌が古くからあって、おそらくポウはそういうものを研究してこの作品の背景をえたのであろう。ポウの他の作品からもわかることであるが、ポウの最大の関心は、死後も生命が継続するのではないかということであった。

現在、アメリカでそういった現象を研究するための典拠となっているのは、ケイシー (Edgar Cayce (1878~45)) の残した膨大なカルテである。転生を主題にしたアメリカの学位論文のほとんどすべてがケイシーの残した資料の分析なのである。現在ケイシー研究のためのケイシー・センターがポウゆかりのそして『鋸山奇談』の舞台となったヴァージニアビーチに建てられ、転生研究のメッカとなっている。

さて、ポウのえがくベドロウ像はいかがなものであろうか。

This young gentleman was remarkable in every respect, ... I found it impossible to comprehend him either in his moral or physical relations.

「この青年はあらゆる点で変っている。体の構造もまたなにを考えているのかもさっぱりつかめないのである。

But in no regard was he more peculiar than his personal appearance. He was singularly tall and thin. He stooped much. His limbs were exceedingly long and emaciated. His forehead was broad and low. His complexion was absolutely bloodless. His mouth was large and flexible, and his teeth were more wildly uneven, although sound, than had even before seen teeth in a human head. His eyes were abnormally large, and round like those of a cat. The pupils, too, upon any accession or diminution of light, underwent contradiction or dilation, just such as is observed in the feline tribe. In a moment of excitement the orbs grew bright to a degree almost inconceivable; seeming to emit luminous rays not of a reflected but of an intrinsic lustre, as does a candle or the sun; yet their ordinary condition was so totally vapid, filmy, and dull, as to convey the idea of the eyes of a long-interred corpse.

「なによりも変っているのは彼の外貌だった。異様に背が高くやせていた。ひどく前かがみであった。四肢はきわて長くやせ衰えていた。ひたいは巾広く、低い。顔色は、完全に血の気が失せていた。口は大きくしなやかであった。歯は丈夫ではあったが、ひどく不揃いで、こんなのは今までに見たことがなかった。眼は異常に大きく、猫の眼のように丸い。瞳孔も猫族のように、光が少しでも接近したり遠ざかったりすると、縮小したり拡大するのであった。興奮状態のときは、眼球はほとんど想像を絶するほどに、きらめくのであった。反射の光ではなく、ろうそくや太陽のように、それ自体の明るい輝きを放っているように見えるのだった。しかし普段の状態ではまったく生気がなく、どんよりとうるんで、永らく埋葬されていた死体の眼のようであった。」

ベドロウの外観は、人間のそれではない。ケイシー・ファイルによると転生を繰り返え

『鋸山奇談』考

すのは、ごく普通の人々であって、ベドロウのような特殊な人でなければならないとは書かれていない。ここにえがかれたベドロウは、あきらかに、人狼伝説にもとずいている。ばくぜんとではあるが、ポウは、ベドロウが進化の程度の低いことを示そうとしているのかもしれない。ベドロウがどうしても年齢不明ということも、彼が以前の生も加えて多くの生を経てきていることを示そうとしているのであろうか。『アッシャー家の崩壊』のロデリックと相違しているところは、ロデリックがきわめて知性的で繊細で、ある意味で進化の終局まで登りつめて、崩壊せんとする者の悲しさを表わしているのに対して、ベドロウは、動物に近く、まだ進化の途上にあり、前途にほとんど無限に繰り返えされるかもしれない道程を感じとって悲哀の表情をうかべているのかもしれない。

The expression of his smile, however, was by no means unpleasing, as might be supposed; but it had no variation whatever. It was one of profound melancholy—of a phaseless and unceasing gloom. these peculiarities of person appeared to cause him much annoyance, and he was continually alluding to them in a sort of half explanatory, half appologetic strain, which, when I first heard it, impressed me very painfully.

彼の微笑みの表情は、予想されるような不愉快なものではけっしてなかったが、なんら変化にとぼしい表情だった。深い悲哀の一樣相をかえることなく果しもなくつづく憂愁の、表情であった。果てしなき輪廻のなげきである。多くの生を生き、多くの死を死なねばならぬ生者のなげきである。インドのまたギリシヤの輪廻・転生思想によるといづれも、その生は無限にくり返えされる流転にすぎなく、意味のないものであると考えられていた。ケイシー・フェイルによると、うそかまことか、転生は、けっして無意味なものなどではなく、高次元の生命に到達するための進化の必要な過程であると記録されている。

ベドロウが以前にインドでオルデブという名をもつ人物として人生を送っていたときは、毒矢に当って死んでしまった。生れかわってベドロウとして人生を送っていたが、こんどは、瀉血治療の際、誤まって毒ひるをあてがわれて死んでしまった。いづれも致命傷は、右のこめかみのところであったし、その死も突然であった。さまざまな年齢逆行の実験であきらかになっていることは、以前の生が鮮明に記憶されているのは、たいいてい突然の死を遂げた人のばあいのようなのである。民話・小説・伝説の中にあらわれる転生物語や離魂記も類似していて、突然死のばあいが多し。たとえば『雨月物語』の中の『夢応の鯉魚』やハーンの『怪談』の中の『力ばか』の話などその他いづれもそうである。

「様相をかえることなく果しもなくつづく陰惨の深い憂愁をうかべたほほえみの表情」(The expression of his smile was one of profound melancholy—of a phaseless and unceasing gloom.)をうかべたベドロウは、彼の変えることのできぬ運命を嘆いているのであろうか。彼がオルデブ氏であったときの生とベドロウ氏であったときの生は、いったい何の意義があったらうか。何の価値も使命もなかったようにおもわれるではないか。これではインド仏教を知らずとも、もはや生れかわることのない寂滅を願わずにおれないではないか。ポウの思想には、無理のないことではあるが、昇華という概念はあきらかにあっても、緩慢なる進化という概念はまだはっきりとはあらわれていないのである。しかし、みあたらないことはないのである。『庭園』の中などに、ばくぜんとではあるが、みうけられるといってもさしつかえないのではないだろうか。この『鋸山奇談』では、ベドロウのふたつの生涯は、どちらかといえば、進化というよりむしろ退化といってもいいだ

『鋸山奇談』考

ろう。インドでの生涯は、ヘイスティングズ（1732～1818）の治政下に起ったチェイテ・シン（Cheyte Sing）の反乱の鎮圧に殉じて閉じられたのだから、それなりの意義があったことでもあろうが、アメリカのベドロウとしての生涯には、なんの意義もみいだされない。たんなる生成流転としての転生しか、ポウは考えていなかったからだろうか。

ふたつの死因がまったく似ていたことのほかに、まだ類似点があった。ベドロウとオルデブは容貌がそっくりであったことである。1780年に描かれたオルデブの肖像画がテンプレートン医師のもとに所蔵されてあったのが、ベドロウにそっくりであったことである。もうひとつは、名前の相関関係である。ベドロウ（Bedoe）がオルデブ（Oldeb）の逆の綴りであったことである。こんな衣服を裏がえしたような、とほうもない関係が名前に実在するとは考えられない。意外な結末を構成するための手法にすぎないのだと読者に感じさせ、この作品のもっとも浅薄な部分としてとられてもしかたがないだろう。名前の裏がえしが作品の内容と必然性があるかどうか、ポウの弁明として想像できることは、こうである。インドのオルデブの生涯は、どちらかといえば陽性である。積極的に仲間を説き伏せ、反乱鎮圧の先頭に立つ。それに反して、アメリカのベドロウのそれは陰性である。若くして慢性神経痛を病み、老いたる人狼のような風貌をしている。インドのオルデブは若き獅子のようであったろう。イギリスの政治家、最初のインド総督ヘイスティングズが治め、チャイト・シンの包囲（The Insurrection of Cheyte Sing, 1780）のあったベナレス（Benares）は、当時イギリスの国威さかんときの地であった。そのときはイギリス人として、こんどはベドロウとして、アメリカのサラトガにあらわれる。アメリカ人ともイギリス人とも書かれていない。サラトガは、独立戦争のとき、ここで行われた戦い（Battle of Saratoga (1777)）でイギリスの将軍 Burgoyne が米軍に降伏し、米国の勝利が決定したところの暗い思い出の地である。ポウがそこまで明と暗について考えたかどうかはわからない。ただ、ベドロウがまたオルデブが、さまよえるユダヤ人のように、このふたつの地にあらわれたことになっている。またどこかの地にあらわれるかもしれないことを暗示しながら、物語は終わっている。